慈眼堂（重文）

死後に「慈眼大師」の尊称を与えられた僧天海（１５３６－１６４３）の廟である。天海は比叡山の南光坊に住み、元亀の兵火（１５７１年）で全山焦土と化した比叡山の復興に尽力した。徳川家康・秀忠・家光三代将軍に幕府の顧問として遇された。寛永二十年（１６４３）に１０８歳で没すると、家光（１６０４〜１６５１）の命により廟堂として建立されたのがこの慈眼堂である。堂内には木造慈眼大師坐像を祀る。

慈眼堂の西側には天海が建てた桓武天皇の廟塔がある。その周囲には、後陽成天皇や、江戸幕府（１６０３〜１８６７）の創始者である徳川家康（１５４３〜１６１６）を神格化した東照大権現の石塔が立ち、さらに慈眼大師塔や、後水尾天皇（１５９６〜１６８９）、鎌倉幕府（１１８５〜１３３３）を倒した新田義貞（１３０１〜１３３８）、源氏物語の作者・紫式部（９７８〜１０１６）、女流歌人の和泉式部（９７６〜１０３０）、女流作家・歌人の清少納言（９６６〜１０２５）らの供養塔のほか、江戸時代以降の天台座主の墓が立ち並ぶ。